北近畿系統の土器と山陰系統の土器

－越中弥生後期・終末期における日本海沿岸交流の諸段階－

高　橋　浩　二

要　旨：越中におけるこの時期の土器様相を検討したところ，大きく３つの段階に区分できた。特に，日本海沿岸地域に系譜のたどれる土器に注目すると，１段階目は北近畿とのつながりが深いが，２段階目には山陰からの影響が強くなり，沿岸土器交流に変化が生じた。これら外来系統土器は基本的に北陸西部を経由するものであったが，加賀の月影式期に並行する３段階目になると，土器の波及が途絶える一方で，山陰の大型首長墓の影響が越中にも及ぶようになり，日本海交流の形態が大きく変容したと考えられる。
キーワード：日本海沿岸地域，丹後，因幡・伯耆，出雲，外来系統土器，四隅突出墓

はじめに

弥生時代後期において，北近畿および山陰から北陸への日本海ルートによる土器伝播の重要性をいちはやく指摘したのは吉岡康暢であった（吉岡1970)。氏や谷内尾晋司は，北陸西部，すなわち越前北部から加賀にかけて，中期後葉以降海路を伝って凹線文土器が波及しはじめ，後期前半に畿内や北近畿，東海などとの関係が深い猫橋式を成立させ，さらに擬凹線文や有段口縁，鼓形器台，スタンプ文など山陰の影響を受けて，後期後半に法仏式が形成されることを示す一方，能登や越中・越後においては，それらの受容が緩慢で前段階の様相が残存し，外縁的様相を呈するとした。琵琶湖方面からの陸路によって，近江とのつながりが深い越前南部の南越盆地と合わせて，この時期の北陸には，大きく分けて３つの土器様式圏が形成された（谷内尾・吉岡1983）ことを鮮やかに論証し，以後の研究に指針を与えることとなった。

本稿は，このうち外縁地帯とされた北陸北東部の越中についての土器様相と沿岸ルートを伝播した外来系統土器 (1) についてあらためて検討し，日本海交流の諸段階を提示するものである。土器交流を考えるための基礎作業として，前稿では，弥生後期から古墳前期までの小期細分をおこなった（高橋2000)。今回，段階ごとの変遷を考えるにあたっては，同じ様相の小期はできるだけまとめて区分することとし，各地との並行関係をみた後に，交流の変遷について考えてみたい。

Ⅰ．時間軸の設定

(1) 南太閤山Ⅰ遺跡墳墓群出土土器の再評価

南太閤山Ⅰ遺跡墳墓群は，富山県中部の射水郡小杉町に所在し，標高約20m～30mの丘陵尾根上に，3群をもって構成される合計8基の方形周溝墓ないし台状墓と4基の土壙墓，2基の土器棺墓からなる。周溝内や木棺覆土内からは供献土器が多く出土しており，墓との共伴関係が明らかである（図1）。

供献土器および棺に使用された土器は，3段階の変遷をもって理解されている（久々1984A)。なかでも各期を通じて認められる高杯A[(2)]（長脚で皿状の杯部形態をもつもの）は，型式の新古が明確であり時期区分の指標にもっとも適すると考えてよい。すなわち，杯部上半がさほど外反せずに短くて器壁が厚い（1・2）がもっとも古く，杯の上半部が徐々に外反して伸びるとともに薄手のつくりに変化していく（3・4）を経て，上半部の拡張がピークに達する一方で脚部径と脚部高がともに小さくなりはじめる（5・6）に至る過程を見ることができる。つまり，高杯Aは，新しくなるにしたがい，杯部上半が伸張し，底径に対して口径が増大化していく傾向にあるといえよう。伴出する器台についても，6号墓の段階では受部および脚裾部が外反有段化した器台B（図2-24）が主体であるのに対して，3号墓の段階になると新たに胴部上半が大きく外反してひらき受部を上方へ拡張した器台D（35）が出現するという大きな変化が認められる。また，5号墓にある広口長頸壺（1・2）が，6号墓で細頸壺（18)，さらに3号墓で有段口縁壺（29）へ移行するなど，供献壺の推移も確かめられる。

このように南太閤山墳墓群の土器は，供献形態の変化にとどまらず，土器様相の変遷段階をも明瞭に示すと考えてよく，これを基軸にして他遺跡の資料を補い，図2のとおり，越中における編年案[(3)]を提示することにしたい。

(2) 越中弥生後期・終末期の土器編年

<u>南太閤山Ⅰ期</u>　壺や甕，器台の口縁など多くに凹線文が認められる段階である。広口長頸壺，広口壺，甕，高杯，器台が主な組成で，これに若干の長頸壺が加わると考えられる。資料として，南太閤山Ⅰ遺跡1号墓・5号墓の他，氷見市柳田遺跡，小杉町囲山遺跡などがある。

広口長頸壺（1・2）は，口頸部がラッパ状に大きく外傾し，断面三角形の口縁帯に凹線を施す。同じような口縁端部のつくりは広口壺（4）にも認められる。一方，広口壺（3）は，端部を上方へ短くはね上げるだけの新しい傾向を示す。これらは畿内第Ⅴ様式の影響を受けたものであろう。甕は，短いくの字口縁で内傾する端部に凹線を施す（5・6）の他，新相において，上方へはね上げた幅狭の端部に擬凹線を施す（7）が出現すると考えられる。甕ではそのほかに，口縁端部が無文のもの，近江系統の受口状口縁をもつものがある。高杯A（8・9）は杯部上半が未発達の重厚なつくりで，杯部下半の長さに対する上半の長さの比率がおよそ

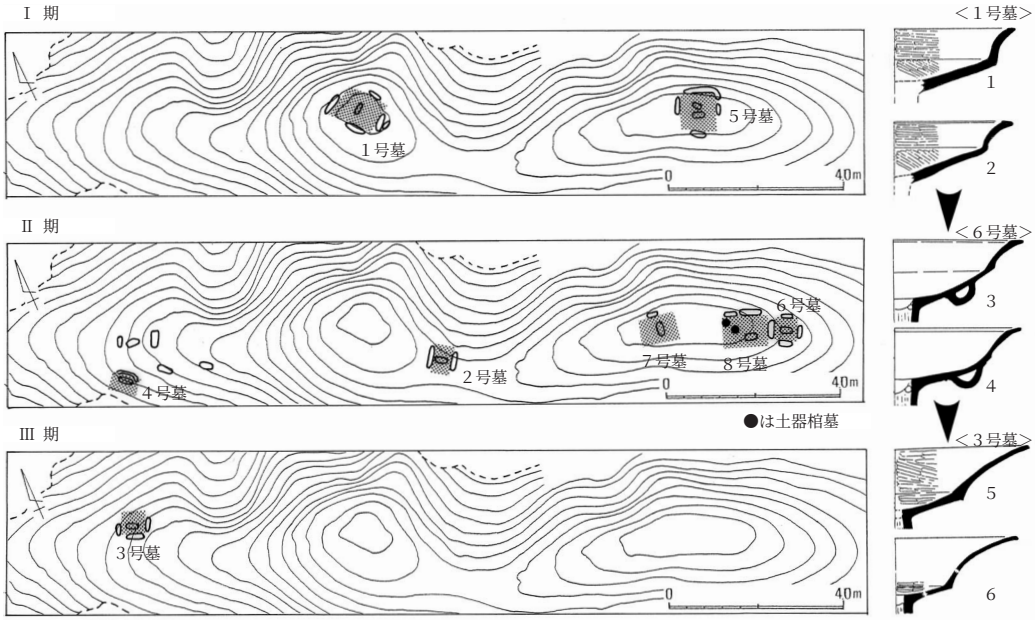

図１　南太閤山Ⅰ遺跡墳墓群の変遷段階と出土高杯の変化（久々1984Ａの図を改変）

1／2以下を示す。器台Ａ（10）は，中型で口縁端部が上方に拡張し胴部が太く裾部のひらきも大きい形態で，後述のように，丹後からの搬入もしくは模倣土器と考えられる。

擬凹線文甕の出現などから，すくなくとも二期に区分できると考えるが，良好な一括資料が今のところ検出されていない。

南太閤山Ⅱ期　有段口縁甕の成立や擬凹線文の定着，前述した高杯Ａや器台Ｂ，さらに大型器台Ｃの普遍化や長頸壺の増加，細頸壺や台付装飾壺のような祭祀的器種やスタンプ祭文の出現などの画期をなす。これらの特徴は，出雲から越後までの多くの地域と連動するものであり，日本海岸における広域な土器圏の形成をみる段階である。資料には南太閤山Ⅰ遺跡６号墓・７号墓等の他，上市町江上Ａ遺跡SD01・SD02・SD03，同町飯坂３号墓などがある。

広口長頸壺（11）は，口頸部が短く直立し端部をゆるい有段状に仕上げるものへと変化し，広口壺（13）も端部の拡張が弱まる。壺の主体は長頸壺に移り，(12）の他，単純口縁のものが多く見られるようになる。甕（14・15）は，直立する幅広の有段口縁で頸部内面が鋭く屈曲し，丸みを帯びた胴部に大きな平底を特徴とする。口縁に擬凹線を施すタイプと無文タイプのものとがある。図示していないが，くの字口縁甕や受口状口縁甕も一定量認められる。この段階には，鉢（17）のような甕以外の器種にも擬凹線文が施されるようになる。高杯Ａ（21・22）は，杯部下半長に対する上半長の比率が1／2～１程度を示すようになる。受部と裾部が有段化した中型器台Ｂ（24）および大型器台Ｃ（23）は，後記のように，山陰地方に系譜をもち北陸の土器組成として確立するものである。脚付の装飾壺（25）は，高杯と同様に棒状の長脚で，

短頸の壺形部分の中位が鋭く内屈し，その部分に帯状の突帯を貼り付けて面を作り出し，さらに３・４本の棒状浮文を施す。鉢形の高杯（16）や口縁が内屈する鉢（19）など，北近畿系統の土器も確かめられる。

高杯や器台の型式変化から，いくつかの小期に細分できると考えるが，今のところ前半部分の一括資料が十分でない。

南太閤山Ⅲ期　基本的にはⅡ期の組成を引き継ぎながらも，大型高杯（32）や器台Ｄが出現し，また無文の有段口縁甕やくの字口縁甕が主体化するなど，北陸北東部の土器地域色が確立するとされる段階である。南太閤山Ⅰ遺跡3号墓の他，大門町布目沢北遺跡12号墓などがある。

壺では，有段口縁壺（28・29）が増加する。図示した中型品の他，幅広の有段口縁をもち肩部の大きく張った大型品，赤彩が施された小型品がある。細頸壺（30）のようなⅡ期に特徴的な型式も前半段階には認められる。高杯Ａ（33・34）は，杯部上半が大きく外反して，下半に対する比率が１以上になり，脚柱部が短く底径も小さなものへ変化する。器台Ｃ（36）は，胴部が短く受部が大型化して高杯とよく似た形態となり，以降，器台Ｄ（35）へ主体が移る。

中山南２号住期　南太閤山Ⅰ墳墓群の直後の時期であり，前に成立した北陸北東部の地域性がさらに明確になる段階である。小杉町中山南遺跡２号住居や大門町串田新遺跡１・３号住居などに良好な一括資料が認められる。

有段口縁甕は，外反する幅広の口縁部をもつように変わる。倒卵形の胴部で口縁部先端が尖って小さく反る（37）は，明らかに北陸西部の月影式の影響を受けたものである。有段口縁の台付装飾壺には，胴部に擬凹線文を施した突帯を付すもの（40）と突帯が付かないタイプがある。高杯Ａ（43）は，小型化する一方で杯部上半がさらに発達した形態となる。同じく器台Ｄ（45）も，器高の縮小したものへ変わる。椀状の杯部をもった小型の高杯（42）と装飾器台（47）は，甕と同じく月影式からの搬入あるいは模倣である。

Ⅱ．他地域との並行関係

（1）　加賀および能登との並行関係

越中と隣接し地理的にも編年的にももっとも関わりの深い，石川県域についてはすでに多くの研究[(4)]があり，南太閤山Ⅰ期が猫橋式，南太閤山Ⅱ期が法仏式，南太閤山Ⅲ期および中山南２号住期が月影式の，それぞれ広義の土器圏に含まれる。

北加賀地域では楠正勝による西念・南新保遺跡編年（楠1996），南加賀では田嶋明人による漆町遺跡編年（田嶋1986），南能登では栃木英道氏による編年案（栃木1995）によって細分小期が設定されているので，それらとの並行関係を見ていくと，漆町２群および西念・南新保３期，栃木７期は南太閤山Ⅱ期に，漆町３群および西念・南新保４期前半，栃木８期前半は南太閤山Ⅲ期に，漆町４群および西念・南新保４期後半，栃木８期後半は中山南２号住期にそれぞ

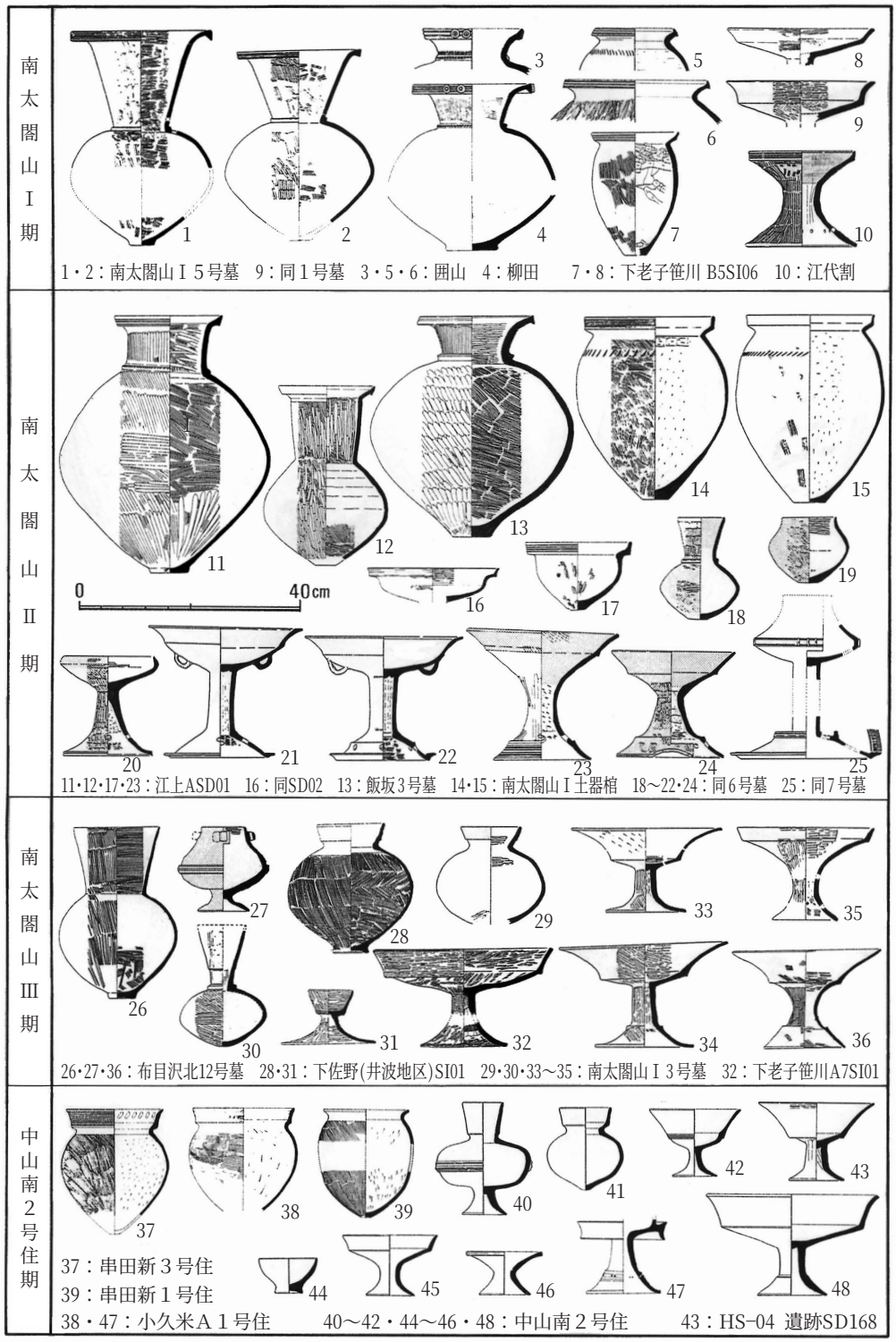

図２　越中弥生後期から終末期の土器様相

れ対応する。南太閤山Ⅰ期については，擬凹線文甕や高杯Ａなどの特徴から，西念・南新保２期後半との対応が考えられる。図２の５・６の甕など古相を呈するものの一部は，西念・南新保２期前半までさかのぼる可能性があるが，浅い椀形の杯部に直立する口縁部をもつ高杯のような中期後葉段階の系譜をひく資料が共伴して認められないので，並行関係については今のところ明確でない[(5)]。

(2) 北近畿および山陰との並行関係

外来系統土器の時期別の動向を示したのが図３である。ここでは，日本海沿岸西部域に系譜が求められる土器に着目し，並行関係を検討してみたい。

近年，野々口陽子によって，丹後地域の土器編年が明らかにされ，合わせて日本海沿岸諸地域との時期的対応が検討されている（野島・野々口1999・2000)。北陸では，もっとも編年が整備されている加賀との関係が主に重視されているが，越中でも多くの北近畿系統土器が知られるようになり，すり合わせが可能となりつつある。また，因幡・伯耆における松井潔の編年(松井1997）や中川寧による山陰地方の広域編年（中川1996）などによって各地の細分案が確立されてきている。野々口氏による対照表（表１）を参考にしながら，これらの編年と南太閤山編年との対応を考えることにしたい。

<u>南太閤山Ⅰ期</u>　まず，器台（3）は，口縁部が幅広である点，胴部の締まりが弱い点，裾部が大きくひらく点など，丹後後期Ⅱ期古相とされる擬凹線文器台に形態や法量，各部の特徴が共通している。高杯Ａ（1・2）は，杯部に把手が付かないものの浅い形状を示しており，丹後Ⅱ期新相に系譜がたどれるとされる西念・南新保２期後半頃のものと類似する（野島・野々口2000)。丹後後期Ⅰ期との関係は明らかにできないが，上記のことから，Ⅱ期との並行関係が確かめられる。

<u>南太閤山Ⅱ期</u>　高杯（12）は，杯部の把手や端部の肥厚など明らかに丹後Ⅱ期新相に系譜をひくものであり，杯部上半の発達から北陸内での若干の変容を示す。鉢形の高杯（9）は，胴の張らない浅い体部で有段口縁をもち，丹後Ⅲ期のものと類似している。フラスコ形の脚付装飾壺

山陰	因幡・伯耆	丹後	南加賀	北加賀		南能登		越中	
中川1996	松井1997	野々口1999	田嶋1986	谷内尾1983	楠1996	栃木1995		本稿	高橋2000
山陰Ⅰ	Ⅴ	後期Ⅰ 古	1群		2期 猫橋式期 1	6期			
		後期Ⅰ 新			2				
山陰Ⅱ	Ⅵ	後期Ⅱ 古			3			南太閤山Ⅰ期	後期Ⅰ
		後期Ⅱ 新			4				後期Ⅱ
山陰Ⅲ	Ⅶ	後期Ⅲ	2群	法仏Ⅰ式期	3期 法仏式期 1	7期	1	南太閤山Ⅱ期	後期Ⅲ
					2		2		
山陰Ⅳ	Ⅷ	後期Ⅳ	＋	法仏Ⅱ式期	3		3		後期Ⅳ
					4		4		
山陰Ⅴ	Ⅸ	庄内併行Ⅰ 古	3群	月影Ⅰ式期	4期 月影式期 1	8期	1	南太閤山Ⅲ期	庄内併行Ⅰ
					2		2		
山陰Ⅵ 古	Ⅹ		4群	月影Ⅱ式期	3		3	中山南2号住期	庄内併行Ⅱ
山陰Ⅵ 中	ⅩⅠ	新			4		4		

表１　土器編年並行関係対照表
網かけの部分は本稿で検討した箇所，点線は流動的な部分を表す。(野島・野々口2000から引用，改変)

(10) は，頸部がしまって口縁部が伸びるもので，丹後では後期Ⅳ期に類例が認められる。これらの点から，南太閤山Ⅱ期は，丹後後期Ⅲ期・Ⅳ期におおよそ対応すると考えられる。

この段階の器台は，丹後系統のものにかわって，山陰に系譜をもつ鼓形の形態へ変化する。

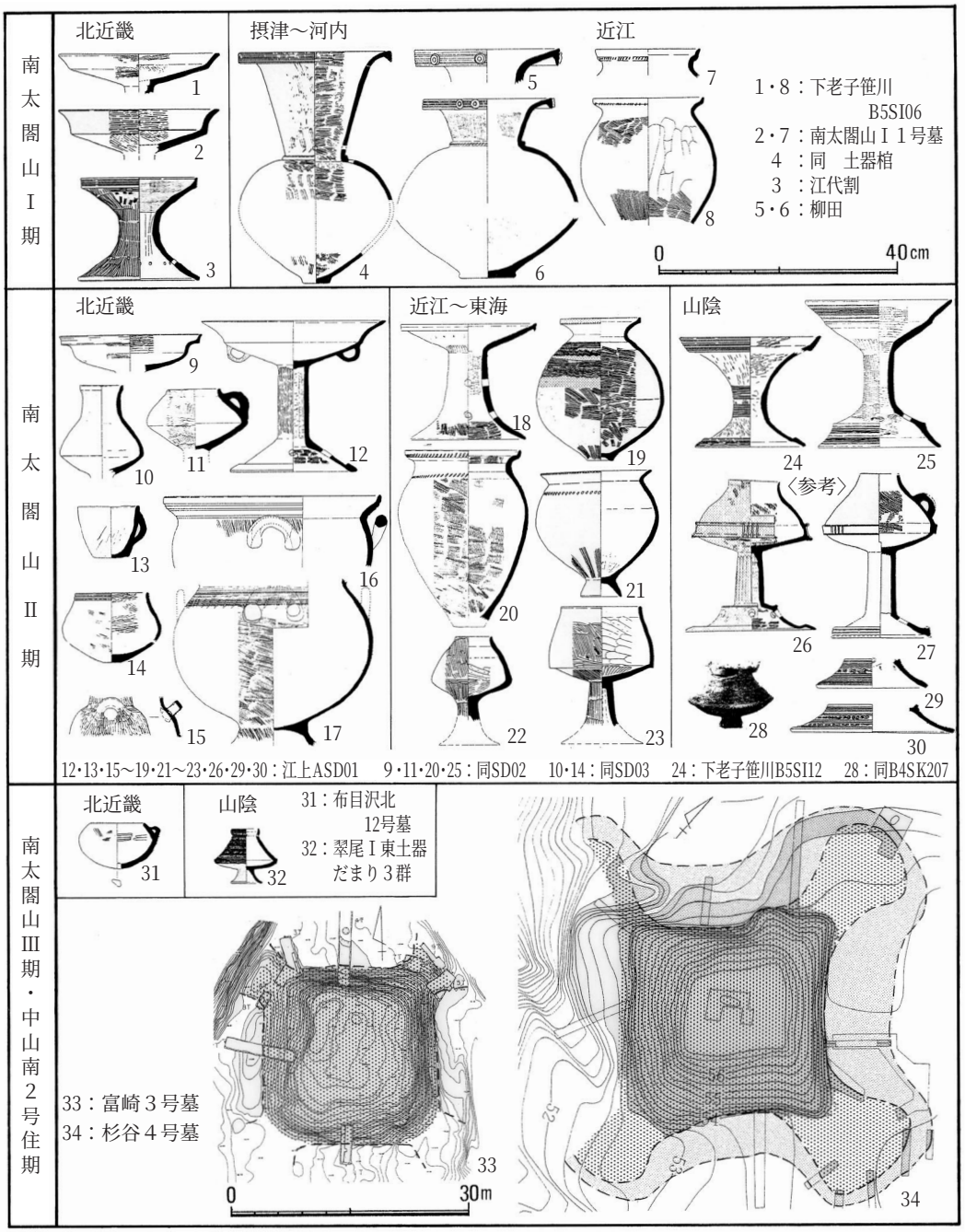

図3　越中における弥生後期・終末期の外来系統要素

よりオリジナルに近いと考えられる福岡町下老子笹川遺跡出土のもの（24）は，受部と脚部に拡張化した段をもち，胴部が締まってそこに6～7本の凹線を2段に施している。大型器台(25）も同じく上下に幅広の段をもち，多条の沈線を施す。これらはともに，安来市九重3号墓のものと共通した特徴を有し，中川氏の山陰Ⅲ期と並行関係にあることが明らかである。因幡・伯耆地域に特徴的な台付装飾壺は松井氏の編年でⅦ期に位置づけられるが，越中においては下老子笹川遺跡（28），富山市江代割遺跡，同市豊田大塚遺跡から搬入品もしくは忠実な模倣品と考えられるものが出土しており，並行関係にあることが確認される。山陰との深いつながりを示すスタンプ文（29・30）がこの段階にのみ認められる他，江上Ａ遺跡の（26）や南太閤山Ⅰ７号墓のもの（図2-25）と類似した脚付の装飾壺が，鳥取市紙子谷遺跡門上谷1号墓(図3-27）から出土している。

南太閤山Ⅲ期・中山南2号住期　北近畿・山陰に限らず，他地域からの土器の影響がほとんど認められなくなる。把手付の扁球形の鉢（31）は，胴部が屈曲せず丸みを帯びたものに変化し，また台付装飾壺も八尾町翠尾Ⅰ遺跡（32）のように，口縁の段が弱くてスタンプ文が施されず，胴部文様が刻目に変容したタイプであることなど対比が困難となる。ただ，丹後庄内並行Ⅰ期の指標である口縁部の発達した器台と越中の器台Ｄが共通した特徴を有することから，双方の時期的関係をみることができる。

Ⅲ．交流の３段階

以上のように並行関係を把握することができたが，特に，南太閤山Ⅰ期とⅡ期においては，北陸外からの搬入土器もしくは摸倣土器が多く認められ，交流が活発化したものと考えられる。一方，Ⅲ期および中山南2号住期については外来系統土器の波及が低調であり，従前言われているように，在地色の強い土器様相が形成された。これらを整理すると，次のような3つの交流段階を指摘することが可能である。

《1段階－南太閤山Ⅰ期》

中期後葉段階の交流ルートに基づいて，北近畿や畿内，近江等の土器の影響が波及し，後期土器組成の基盤を形成した。殊に，丹後系統の高杯は，その後の在地化の過程をたどることが可能である。これらの土器の影響は，同時期の北陸西部と共通した特徴を有し，加賀経由でもたらされたと考えられる。

《2段階－南太閤山Ⅱ期》

山陰系統土器の波及が顕著となり，装飾性の強い祭祀的器種を特徴とする土器様式を成立させた。北加賀・南加賀を中心域とする法仏式は，供献器種の大型化およびスタンプ祭文などの加飾性が特徴で，山陰系譜の鼓形器台，丹後系統の高杯，新来の細頸壺や脚付の装飾壺などの土器群が周辺地域に傾斜的に分布しており，外来系統の影響は同じく基本的に，いったん加賀

を経るものと考えられる。

北陸で主体化する鼓形器台は，この時期の北近畿ではほとんど受容されていない。同じく因幡や伯耆の台付装飾壺も，丹後や但馬での出土例が認められず，明らかに北近畿圏を飛び越えて北陸に分布している[(6)]。後期後半の日本海沿岸諸地域では土器地域色が徐々に醸成されつつあり，様式圏の確立にあたって地域間交流の親疎が反映されたと思われるが，この段階の日本海土器交流は，沿岸ルートを徐々に北上するというものではなく，山陰西部や山陰東部，北近畿などの各地と北陸西部が，個別に複数の海路を結ぶようになったと考えられる。

《**3** 段階－南太閤山Ⅲ期・中山南 **2** 号住期》

外来系統の土器は，北陸においてほとんど認められなくなる。土器は在地化がすすみ，加賀以西と能登・越中以東の地域差が顕在化しはじめ，それぞれ固有の土器圏を形成しはじめる。

一方，山陰からの影響を，首長墓において認めることができる。すなわち，南太閤山Ⅲ期に富崎 3 号墓（図 3-33）や鏡坂 2 号墓，さらに中山南 2 号住期前半に六冶古塚，後半前後に杉谷 4 号墓（34）などの四隅突出墓が相次いで呉羽丘陵上に築造される。平地に築かれ四隅が未発達な加賀の松任市旭 SX21 号墓とは形態が異なるものであり，肥大化した四隅構造をもつ安来市宮山 4 号墓のような出雲地域の首長墓と突出部の特徴を共有している。

この段階には，北陸外との土器交流が乏しくなる反面，大型の墳丘墓に関係する交流が外縁地域にも及ぶようになった。この段階の交流は，移住や内容物の運搬，製作技術の伝播など，前段階までの土器や人の移動に関するようなものとは明らかに異なり，首長間交流に伴う形態が顕著になったと考えられる。すなわち，日本海沿岸地域を結ぶ北陸への交流ルートは，この段階に至って，重層的・政治的な形態へ変化し，それによって沿岸各地の地域的再編もさらに促進されたと考えられる。

おわりに

以上，越中の弥生時代後期・終末期における土器様相と外来系統土器の動向についてみてきた。程度の差こそあれ，外来系統土器の系譜や波及時期は加賀の様相と一致しており，基本的に同一の地域圏を形成していたことが再確認された。日本海沿岸西部域から北陸北東部へのこの時期の土器の流れは，ほぼ一方向であり，出雲や因幡・伯耆，丹後等の地域からの大きな動きが予想される。北陸ではこの頃，高地性集落が出現そして廃絶し，また出土鉄器数が増加しており，社会的および経済的な変容と外来系統土器の動態とが無縁でなかったことを示している。さらに，中山南2号住期直後の，加賀では白江式期にあたる時期には，東海系統や山陰系統，畿内系統などの土器の動きが再び活発化し，北陸系統土器の拡散も認められるようになって，いっそう交流が複雑化したことが想定されている。

今後は，これら土器の波及現象がどのような目的に伴って起こり，その背景にいかなる歴史

性が潜むのか，さらに他の要素を加えながら考えてみたい。

最後に，本稿をなすにあたって，岡本淳一郎，鹿島昌也，谷口恭子，中川 寧，中野由紀子，錦田剛志，野々口陽子，平川 誠，藤田富士夫，古川知明，堀沢祐一，町田尚美，松本岩雄，松井 潔，湯村 功，渡辺貞幸の各氏にご協力，ご教示を賜りました。発掘調査や研究業務等でお忙しい中，貴重な時間を割いていただいた研究者の方々に，深く感謝いたします。

注

(1) 本稿では，外来系統土器を，在地に系譜のたどれない特徴や製作技法をもった土器とする。他地域から搬入された土器，他地域から移住して来た人が移住先でつくった土器，他地域を訪れた人が地元に戻って訪問先の土器を真似たもの，他地域産土器の情報のみを得て在地で真似たものなどの形態があるが厳密な区分が困難であるため，本稿ではこれら搬入土器および模倣土器等をまとめることとし，系譜元の地域が限定できるものは，～系統土器として記述する。

(2) 前稿（高橋2000）では，長脚で皿状の杯部形態をもつものでも，脚部形態によってさらに細分類している。

(3) 越中における当該時期の土器編年研究の現状などについては前稿でふれているが，上野章（上野1972）や久々忠義（久々1984B・1986）の検討を基礎にして，最近では岡本淳一郎ほか（岡本他1999）の考察がある。

(4) 参考とした主な研究は，谷内尾1983，北野1986，栃木1986・1987A・1987B，小田木1989，田嶋1991，吉岡1991，川村1993である。

(5) 前稿では，後期Ⅰ期を西念・南新保２期前半，後期Ⅱ期を西念・南新保２期後半に並行するものとしたが，流動的な要素が多く，今回表１のようにあらためたい。

(6) 台付装飾壺の分布については，野々口の論文（野々口2000）に詳述されている。また，松井氏から多くの教示を得た。

参考文献

上野　章1972「６，弥生時代　附，古式土師器」『富山県史』考古編

岡本淳一郎他1999「佐野台地における古墳出現期の土器について」『富山考古学研究』第２号，財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

小田木治太郎1989「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学』Ⅱ，石川考古学研究会

川村浩司1993「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較史研究』第２号，新潟大学環日本海地域比較史研究会

北野博司1986「宝達山山麓地域における“月影式”併行期の土器群」『シンポジウム「月影式」土器について』報告編，石川考古学研究会

久々忠義1984Ａ「弥生時代後期の墓地について」『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』(2) 南太閤山Ⅰ遺跡・南太閤山Ⅱ遺跡，富山県教育委員会

久々忠義1984Ｂ「弥生時代の時期区分」『北陸自動車道遺跡調査報告』上市町木製品・総括編，上市町教育委員会

久々忠義1986「富山県における“月影式”土器について」『シンポジウム「月影式」土器について』報告編，

石川考古学研究会
楠　正勝1996「弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『金沢市西念・南新保』Ⅳ，金沢市教育委員会
高橋浩二2000「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内式土器研究』XXⅡ，庄内式土器研究会
田嶋明人1986「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡』Ⅰ，石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人1991「北陸」『古墳時代の研究』第6巻土師器と須恵器，雄山閣出版
栃木英道1986「“月影式”土器の成立」『シンポジウム「月影式」土器について』報告編，石川考古学研究会
栃木英道1987Ａ「“月影式”土器をめぐる編年的な問題について」『吉竹遺跡』，石川県立埋蔵文化財センター
栃木英道1987Ｂ「スタンプ文について」『吉竹遺跡』，石川県立埋蔵文化財センター
栃木英道1995「第8章　考察」『谷内・杉谷遺跡群』，石川県立埋蔵文化財センター
中川　寧1996「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学会誌』第13集，島根考古学会
野島　稔・野々口陽子1999「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓」(1)『京都府埋蔵文化財情報』第74号，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
野島　稔・野々口陽子2000「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓」(2)『京都府埋蔵文化財情報』第76号，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
野々口陽子2000「弥生大形墳墓出現前夜の土器様相」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10，雄山閣出版
松井　潔1997「東の土器，南の土器」『古代吉備』第19集，古代吉備研究会
谷内尾晋司1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』，石川考古学研究会
谷内尾晋司・吉岡康暢1983「北陸」『三世紀の考古学』下巻三世紀の日本列島，学生社
吉岡康暢1970「高志路の展開」『古代の日本』第6巻中部，角川書店
吉岡康暢1991「北陸弥生土器の編年と画期」『日本海域の土器・陶磁』古代編，六興出版
(なお，発掘調査報告書については，省略しました)

付記：本稿は，平成13年度㈶富山県高等教育振興財団助成金による研究成果の一部である。